



木造の船で クジラを追う

インドネシア・ソロール諸島の
レンバタ島に行った。その島の南
西海岸にラマレラという、人口
2000人の捕鯨をしている村が
ある。彼らの捕鯨は商業的なもの
ではなく、生存漁労、つまりこの
生業^{なりわい}なくしては生きていけない漁

だ。この村の沖合は急に深くなっ
ている。そのためにマッコウクジ
ラの回遊路になっている。5月か
ら10月までが漁期だ。年間40頭以
上捕れた年もあるが、4頭しか捕
れなかった年もある。運、不運に
左右される不安定な漁だ。
2008年、私たちが行った時
は、5月に12頭、6月に5頭捕れ
て、それ以来捕れていなかった。



グレートジャーニーで出会った

多様な人・家族・ コミュニティ



文・写真＝探検家
関野 吉晴 vol. 10

▶2008年7月 インドネシア・ソロール諸島、
レンバタ島

【1-2ページ写真】

一度クジラに鉤を刺すことに成功しても、潜って逃げて
しまうので、息継ぎに出てきた時を狙って二番鉤を打
つ。クジラが潮を吹いている

ラマレラのクジラ漁



クジラに船をひっくり返されることもあるため、クジラに近づく時は高価なエンジンは外して別の船に渡し、手漕ぎで慎重に進む

しかし、幸運にも9日間の滞在中に2回も「バレオ！」という声が掛かった。これは「クジラが出たぞ！」の意味で、クジラが発見されると全ての村人に大声で伝えられる。

一回目の「バレオ」は7月31日、ブレダン（彼らの伝統的な、木造帆船）に乗っている時だった。一斉に出たブレダンの1艇に乗っていたのだが、他のブレダンが発見したという連絡が入った。まだラ



村の人たちも、漁を終えた船を陸に上げるのを手伝う

に上げられると、多くの村人たちが集まってきた。ブレダンをヤシの葉でふいた屋根がかぶせられた艇庫にみんなで押し上げた。クジラも浜の端に寄せた。解体は翌日にすることになった。

捕らえたクジラを分配し物々交換で分かち合う

クジラは夜中のうちに、浜辺の水際に移されていた。翌朝、明るくなっても、日の出前は人影が少



分配されたクジラの肉を頭に載せて持ち帰る

ない。村の若い女性たちが携帯電話でクジラと一緒に記念撮影をしていた。2年前に電気が通じ、村のごく一部だが、1年前から携帯電話が使えるようになっていた。夜明けとともに男たちが集まり始めた。やや大きなナイフで分厚い脂肪のついた表皮を剥がしていく。老人たちの指導で肉、内臓なども次々と解体していく。一方で浜辺では分配も行われる。分配にあずかれるのはクジラを仕留めたラムファアに乗っていたブレダンの乗組員全員だ。漁の時にどんな役割をしたかで、解体したクジラ



クジラに近づいた。先頭のラムファアが、後ろにいる助手に「鉾を渡せ」とジェスチャーで伝えている

マレラに着いて4日目、こんなに早くマッコウクジラが見られるとは思っていなかった。まだ心の準備はできておらず、慌てた。そして心が高鳴った。既にマンタ（巨大エイ）漁は見ていたが、ブレダンの乗組員の反応や表情、意気込みは、マンタとクジラとは大違いだ。険しいが、高揚した表情だ。20頭ほどの群れだった。この時期の群れは子連れが多い。「バレオ」の掛け声の方向に急いで向かう。ほとんどのブレダンがエンジン付きだ。他のブレダンがクジラに接近していた。ブレダン特有

チームワークを発揮し鉾一本でクジラを仕留める

ラムファアのすぐ後ろに助手がいて、大きなジェスチャーでブレダンの舵（かじ）を握る者に進むべき方向を指示している。ラムファアが潮を吹くクジラの背中に向かって思い切りジャンプした。鉾に全体重をかけて、クジラの体内にできるだけ奥深くまで突き刺さうとしている。うまく突き刺さったのだろうか。クジラはそのまま潜っていった。この時にブレダンが尾びれに叩かれて沈没することもある。

ラムファアは泳いでブレダンに戻った。そのブレダンの乗組員たちが鉾につながっていたロープを引っ張っている。鉾はクジラの体を射抜いたようだ。クジラが疲れるのを待って、引き寄せ、次の一

の、先端に突き出た竹製の台の上で、長い柄のついた鉾（もり）を持ったラムファア（射手）が黒い塊を凝視していた。



定期市で行われる物々交換。クジラ肉を手にして交渉

のどの部分が分配されるのか、詳細に決められている。浜辺で男たちが車座になって、分配を始めた。それらは自宅に持ち帰ってさらに細かくされた。それを親戚の者、近隣の者に分配する。最終的にはほとんどの家族にまで行き渡る。彼らはクジラの表皮や脂肪、肉、内臓、頭の全てを分配し、持ち帰るが、それらの半分は定期市で農産物と物々交換される。定期市は土曜日に、ラマレラから7キロメートル東に行ったウランドニ村で開かれる。頭に大きな荷を載せて徒歩で行く者もいるが、最近走り始めた乗り

撃を加えなければならない。群れのクジラたちも動揺しているようで、分散し始めた。鉾の刺さったクジラは1度で仕留められるわけではない。深く潜って、再び浮上して大きく潮を吹く。疲れるのを待って、2度、3度とラムファアがジャンプしなければならぬ。1頭のクジラをその艇に任せて、他のブレダンは散っていった。しかし、この日に捕れたクジラは1頭だけだった。クジラが村の海岸



クジラは皮膚が厚く、鉾を投げるだけでは跳ね返されてしまう。船から跳んだラムファアが体重を思いきりかけ、鉾がクジラに突き刺さった。ラムファアは乗組員から尊敬されている

合いバスで行く者も多い。

大きな木の周りに農民や他の漁村からも多くの女性が集まっていた。サルーンにトウモロコシ、バナナ、アボカドその他の野菜を並べていた。漁師町からは魚を持って来ている。午前10時に村の役人が笛を吹いた。物々交換開始の合図だ。交換のレートは決まっている場合もある。例えば干したクジラ肉の薄片はバナナ12本と交換する。しかし値段交渉する場合も多い。この物々交換のおかげで畑作のできないラマレラの人たちも農産物を手に入れているのだ。

Yoshiharu Sekino

1949年東京生まれ。一橋大学在学中に同大探検部を創設し、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。1993年から、アフリカに誕生した人類がユーラシア大陸を通してアメリカ大陸にまで拡散していった約5万3千kmの行程を遡行する旅「グレートジャーニー」を開始。南米最先端ナバリノ島を出発し、10年の歳月をかけて、2002年2月10日タンザニア・ラエトリにゴールした。「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」は2003年にシベリア、サハリン経由の北方ルートから始め、中国から朝鮮半島経由のルートを終え、最後に海上ルートは2011年に石垣島にゴールした。